『学会見聞記』
第55回米国核医学会に参加して
Impression of the society of nuclear medicine
55th annual meeting

奥田光一

到着直後のトラブル
第55回米国核医学会は、2008年6月14日から18日までの間、アメリカ南部のニューオーリンズにて開催されました。会場はErnest N. Morial Convention Centerでした。

今回は初めての国際学会ということもあり、出発当日から緊張気味でした。成田空港から無事出発し（ハプニングその1：実は成田空港でタクシーを忘れたことに気付き、空港内にて購入しました。）、アトランタ経由でニューオーリンズに夕刻に到着しました。日本の良食のような昼食と深夜酒を腹に入れながら、Airport shuttleで乗り、宿泊ホテルまで無事に到着しました。

頭の中はベッドに飛び込む姿を想像しながら、ホテルのフロントにて予約の確認をお願いしたところ、「予約が入っていません。」との事（ハプニングその2）。ここへ到着しては日本男児の私とことで、乍らが思わず英語で必死に説明しました。日本の旅行会社の予約ミスがあったともかくならず、無事宿泊でできることになったのです。チェックインした時間は深夜の10:30でした。

Annual Meeting開始

翌日は時差げないためか早朝に目が覚め、残しておいた昨晩のサンドイッチを食べ、会場に向かいました。Registrationを済ませ、明後日のポスター発表のため、ポスター会場に急ぎました。ポスター会場に入ると、まず驚いたのは会場の大きさです。日本のポスター発表の規模とは、比べ物になりませんでした。おそらく全会場でポスターに目を通すことは不可能ではないかと思いました。幸いなことに私のポスターは比較的入り口から近い場所であったため、人に干されていないところに置き、たくさんの方に見てもらえるのではないかと期待しました。ポスターの概要をまとめたチラシを設置し、それが学会の閉会までに無くなることを願いながら、ポスター会場を後になりました。

夕方のセッションまで少し時間に余裕が出来たため、ニューオーリンズの街を観光しました。フランスの植民地の影響が残る建物を眺め、JAZZを聴きながら食事を取り、ニューオーリンズを満喫しました。

ポスター発表にて

今回、私は幸運な事にポスター発表をする機会に恵まれました。題目はEffect of attenuation correction on normal myocardial perfusion SPECT database using SSPAC methodです。内容を概説しますと、核医学検査は放射性同位元素を体内に注入し、各臓器のシンチグラムや機能、機能を計測する検査方法であり、投与された放射性同位元素からのg線が被検者の体内において吸収されるため、この吸収を補正するために一般的にはX線CTから得られる体の吸収分布を使用します。しかし本研究はX線CTを使用せず、核医学検査から得られる情報のみを用いて吸収補正を行う方法を提案しました。

ポスター発表の時間は4日目の14:30〜15:15までの45分間でした。簡単な英語のコミュニケーションもままならない私にとっては、45分間はとても長く感じられましたが、実際に開始すると一瞬の間に過ぎ去っていきました。また発表にあたり、YES、NOをはっきりする事に心懸けました。

ポスター発表も終盤に差し掛かった時に、今回の大きな山場が待っていました。事前の情報ではポスター発表中にChairmanが返し、研究結果について質問する場合もあるとの事でした。本当にやってくるとは夢にも思ってませんでした。自分紹介をし終わると、事前の質問を受けたのか不安でいっぱいの所に、「研究の概要を教えて下さい。」との事。一瞬、頭が渦巻になりそうでしたが、事前の概要を英語で書いていたため、言い出しながらもどうもどうも説明を始めました。不器用な英語にも関わらず、Chairmanは相槌を打ちながら発表を聞いてくれました。また、Chairmanからの質問については75%程度、受け答えする事が出来ました。

この山を乗り越えてからは、少し自分自身の中であっ切れらのように、発表時間の最後には、相手の質問に対して「Good point!」と相槌を打てるようになるまで、コミュニケーションが上達したように思いしました。

Annual Meetingを通して

日本と比べアメリカは検査対象の人口数が多く、保険制度の違いを考慮しても、機器の開発スピードや多種多様の放射性薬剤の研究等において日本の一歩先を行いているように感じました。しかし、日本のグループがアメリカの研究グループに引き取らない研究結果を発表していたことを考えると、一概に保険制度等の影響とは考えづらく、研究者のpassionによって如何人がなるかが分かりました。まず、現在研究を行っている臨床的画像処理において世界一とまではいかなくても、日本を目指して頑張りたいと思いました。